

鹿病防第64号
令和8年1月28日

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和7年度病害虫発生予察情報について

このことについて、発生予報第11号（2月）を発表したので送付します。

鹿児島県病害虫防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



ホームページアドレス：[https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/
kiad/boujosh/index.html](https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosh/index.html)

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

- | | |
|--------------|---|
| 1. 使用する人の安全 | 使用者自身の健康管理、安全使用 |
| 2. 作物に対する安全 | 適期、適正防除で薬害防止 |
| 3. 農産物に対する安全 | 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守) |
| 4. 環境に対する安全 | 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川、湖沼、海等への汚染防止)
(養蚕、養蜂等への危被害防止) |
| 5. 保管管理の安全 | 保管管理の徹底で事故防止 |

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和7年度 病害虫発生予報 第11号

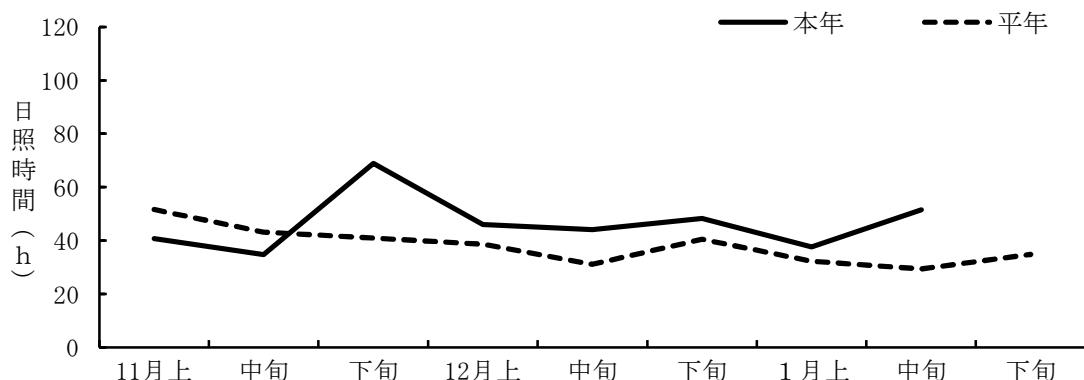
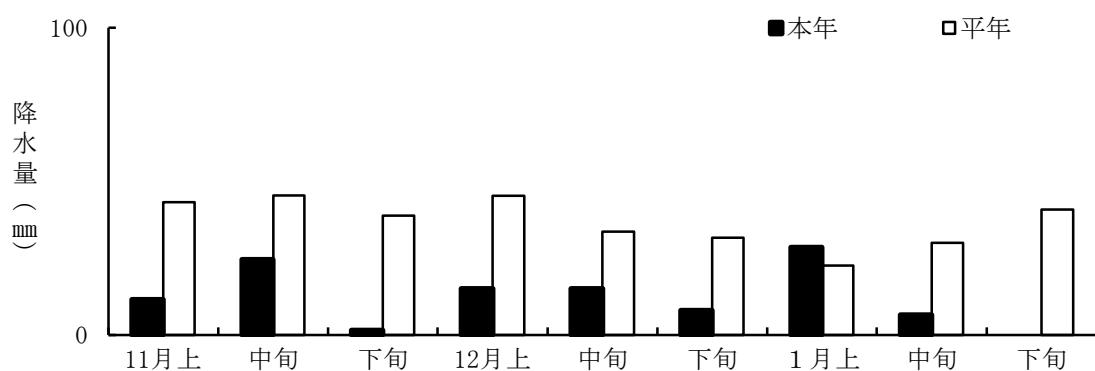
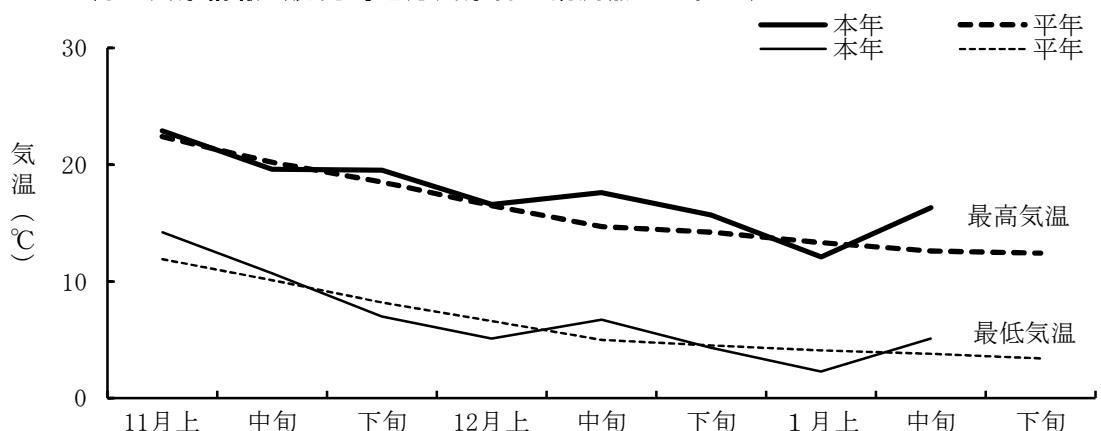
令和8年1月28日
鹿児島県病害虫防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（1月24日～2月23日） 令和8年1月22日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率(%)			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	40	30	30	九州南部、奄美の気温は平年並み、九州南部、奄美とともに降水量は少なく、日照時間は平年並みが多い見込み
	奄美地方	40	30	30	
降水量	九州南部	50	30	20	
	奄美地方	50	30	20	
日照時間	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	20	40	40	

II. 11～1月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物	病 害 虫 名	発 生 量	
		現 況	予 報
野 菜	キュウリ	べと病	少
		アザミウマ類	やや少
		コナジラミ類	少
	トマト	うどんこ病	やや少
		コナジラミ類	多
	ピーマン	斑点病	並
		うどんこ病	やや多
		アザミウマ類	多
	イチゴ	うどんこ病	やや少
		アザミウマ類	やや少
		ハダニ類	やや多
	キャベツ	菌核病	やや多
		べと病	多
	エンドウ類	うどんこ病	並
		アザミウマ類	並
	バレイショ	疫 病 (熊毛地域)	並
		" (奄美地域)	やや少
		菌核病 (熊毛地域)	並
		" (奄美地域)	やや少
花 き	キ ク	ハダニ類 (県本土 (施設))	やや少
		" (奄美地域 (露地))	並
		アザミウマ類 (県本土 (施設))	やや少
		" (奄美地域 (露地))	並

【病害虫発生予報】

I. 普通作物

防除に関する今月の留意事項

1. 水稻

(1) スクミリンゴガイ（令和7年度技術情報第22号、令和7年11月26日付参照）→

早期水稻、普通期水稻で、以下の耕種的防除対策に取り組む。

ア 発生ほ場では2月までの極寒期に、トラクターでは場を耕耘（走行速度を遅く、ロータリーの回転は速くする）して、土壤中の貝を寒風にさらすとともに破碎する。

イ 用水路内での越冬場所をなくし、水田への貝の侵入を減少させるため、水路での泥上げや除草に努める。



2. サツマイモ

(1) サツマイモ基腐病

次作の発病リスクを軽減するために、以下の防除対策を徹底する。

<育苗床>

ア 育苗床では、萌芽の確認や育苗管理及び採苗作業で繰り返し出入りするなど、再汚染のリスクが極めて高いため、育苗床専用の長靴や手袋などを使用する。

イ 萌芽した芽に変色やしおれ症状が見られた場合は、直ちに種いもごと抜き取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。また、萌芽せずに腐敗した種いもも掘り取り、同様に処分する。

<採苗>

ア 基腐病等の感染を抑えるため、地際部から5cm（2～3節）以上の高さの位置で採苗する。

イ 採苗するハサミの刃先は、こまめにバーナー等であぶって殺菌・消毒する。

ウ 苗消毒は、採苗後速やかに行う。薬液は、日光や汚れなどで消毒効果が減少するため、使用日ごとに毎回調整する。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県（https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20240315133011-1.pdf, https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20221226173000-1.pdf），農研機構（https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotato04.pdf）をご覧ください。



鹿児島県
サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第4版)
令和6年3月改訂



鹿児島県
さつまいも育苗の
ポイント
(令和4年12月)



農研機構
サツマイモ基腐病の
発生生態と防除対策
(令和4年度版)

II. 野菜

1. キュウリ

(1) ベと病

ア 予報内容

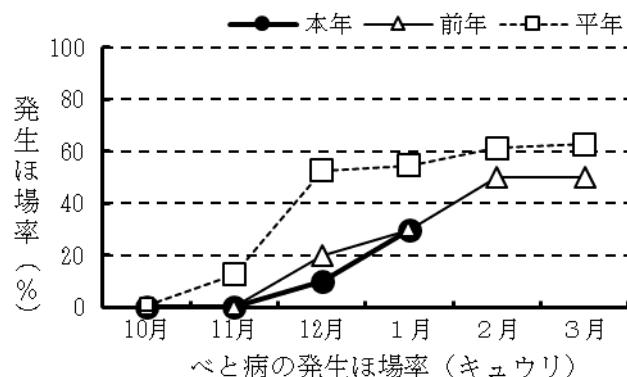
- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作型 促成栽培
 (ウ) 発生量 少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：少
 発生ほ場率 30% (平年 55%) : 低い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウスの通風換気に努める。
 (イ) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
 (ウ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
 (エ) 多発すると防除が困難になるので、早めに防除する。
 (オ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

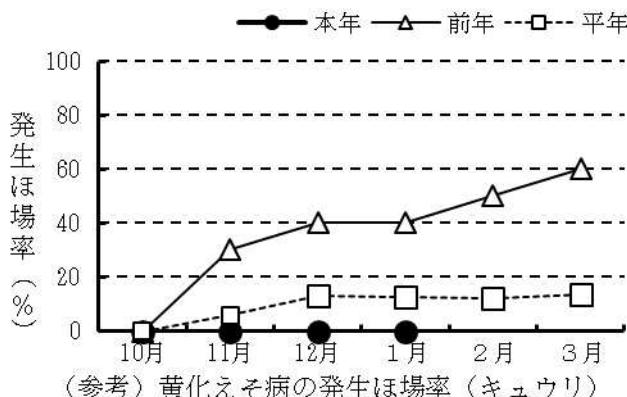
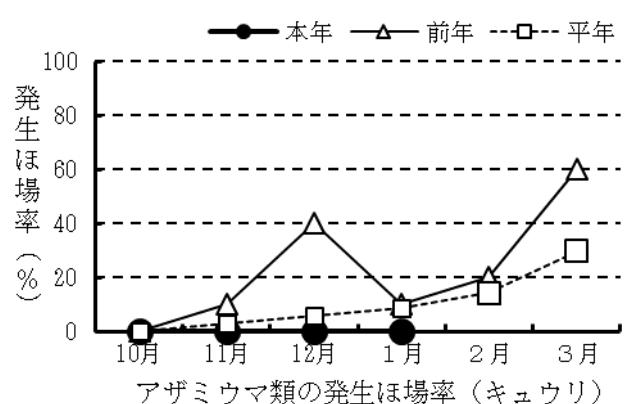
- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作型 促成栽培
 (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
 発生ほ場率 0 % (平年 8 %)
 : やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 黄化えそ病 (MYSV) を媒介する。青色粘着トラップを設置して早期発見と早期防除に努める。
 (イ) 黄化えそ病の発病株は伝染源となる。ほ場の見回りを行い、発病株を認めたら早急に抜き取り、処分する。
 (ウ) 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
 (エ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。



(参考) 黄化えそ病の発生ほ場率 (キュウリ)

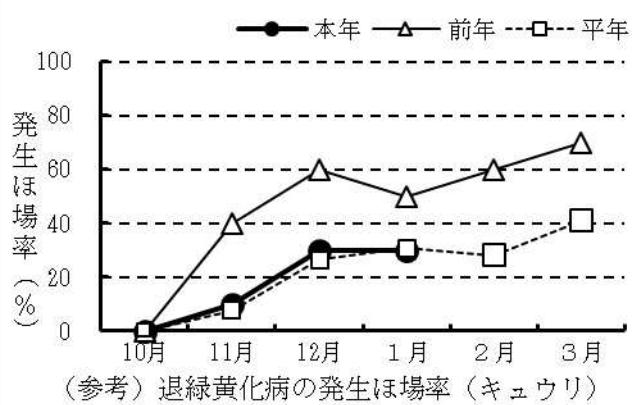
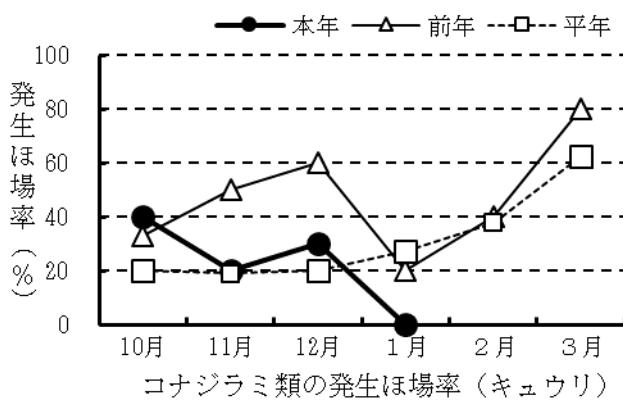
(3) コナジラミ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作型 促成栽培
 (ウ) 発生量 少
 イ 予報の根拠
 (ア) 調査結果 発生量：少
 発生ほ場率 0% (平年 27%)
 : 低い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 退緑黄化病 (C C Y V) を媒介する。
 黄色粘着トラップを設置して早期発見と早期防除に努める。
 (イ) 退緑黄化病の発病株は伝染源となる。ほ場の見回りを行い、発病株を認めたら早急に抜き取り、処分する。
 (ウ) 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
 (エ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。



2. トマト

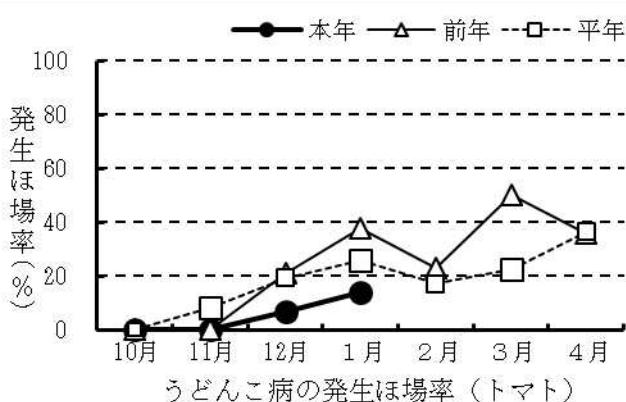
(1) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作型 促成栽培
 (ウ) 発生量 並
 イ 予報の根拠
 (ア) 調査結果 発生量：やや少
 発生ほ場率 14% (平年 26%)
 : やや低い
 (イ) 気象予報
 降水量：少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
 (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
 (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
 (エ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。



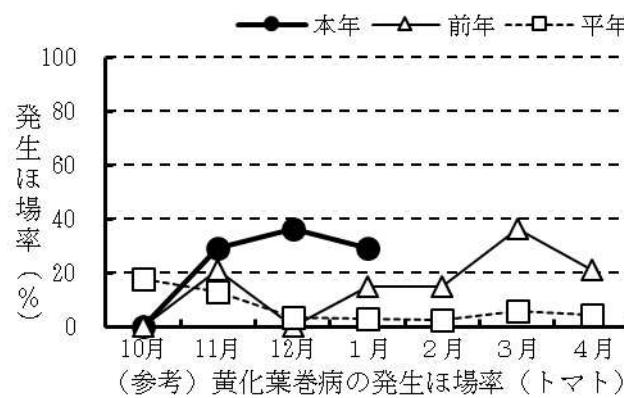
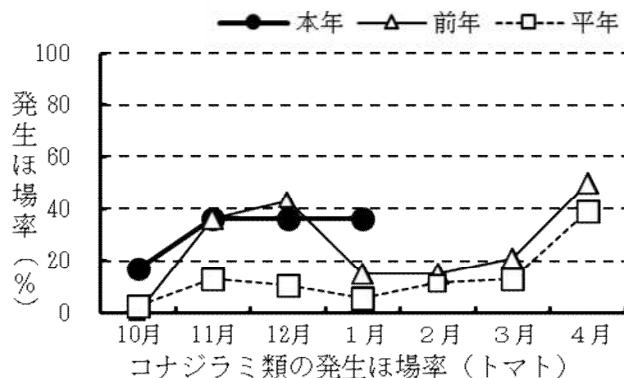
(2) コナジラミ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多
- イ 予報の根拠
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 36% (平年 6 %)
：高い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 黄化葉巻病 (T Y L C V) を媒介する。黄色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 黄化葉巻病の発病株は伝染源となる。ほ場の見回りを行い、発病株を認めたら早急に抜き取り、処分する。
- (ウ) 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
- (エ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。
- (オ) 農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。
(令和 6 年度技術情報第 25 号、令和 6 年 12 月 26 日付参照) → 
- (カ) 農薬によっては、ミツバチに影響があるので選定に注意する。



3. ピーマン

(1) 斑点病

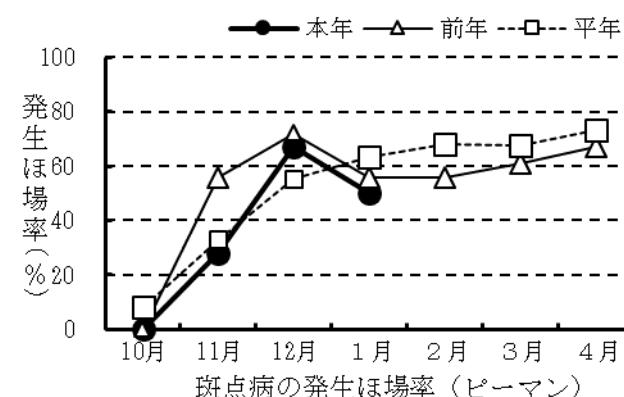
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並
- イ 予報の根拠
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 50% (平年 63%)
：やや低い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (ウ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。
- (エ) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (オ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。



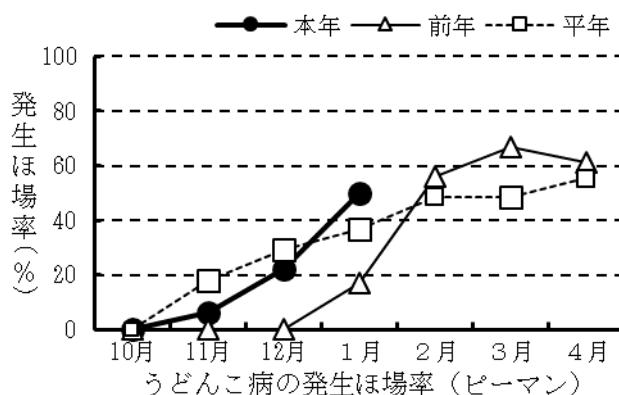
(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作型 促成栽培
 (ウ) 発生量 多
 イ 予報の根拠
 (ア) 調査結果 発生量：やや多
 発生ほ場率 50% (平年 37%)
 : やや高い
 (イ) 気象予報
 降水量：少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
 (イ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
 (ウ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。
 (エ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。



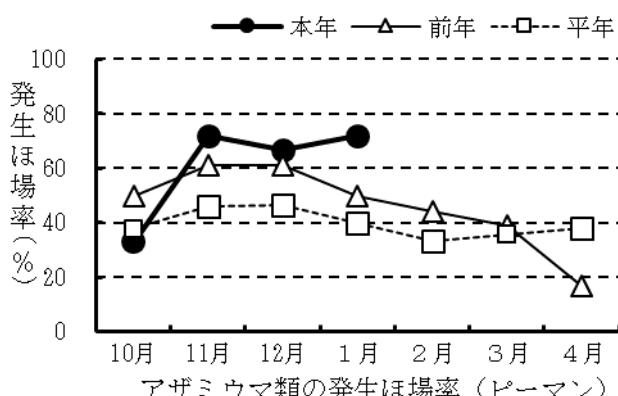
(3) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作型 促成栽培
 (ウ) 発生量 多
 イ 予報の根拠
 (ア) 調査結果 発生量：多
 発生ほ場率 72% (平年 39%) : 高い
 発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 花や新芽の中など薬液の付着しにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。
 (イ) 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。また、多発したほ場では天敵の状況に応じてリセットを考慮した防除を行う。
 (ウ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。

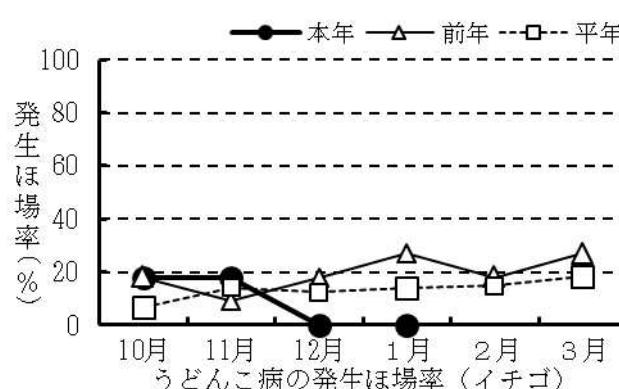


4. イチゴ

(1) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作型 促成栽培
 (ウ) 発生量 並
 イ 予報の根拠
 (ア) 調査結果 発生量：やや少
 発生ほ場率 0 % (平年 14%)
 : やや低い
 (イ) 気象予報
 降水量：少ない (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (エ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 9% (平年 28%)

: やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 粘着トラップを設置し、早期発見

と早期防除に努める。

(イ) 花や新芽の中など薬液の付着しにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布に努める。

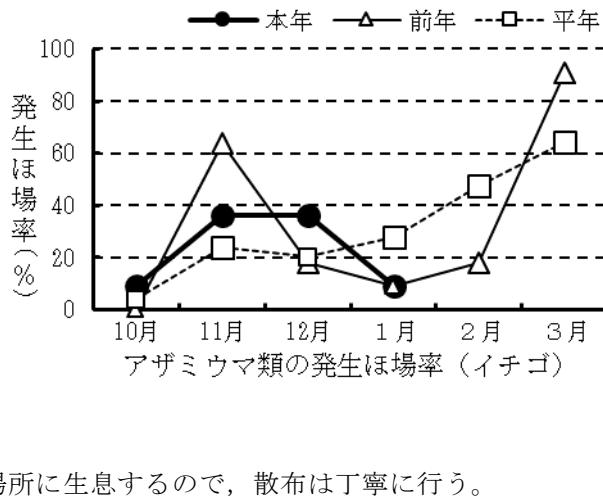
(エ) ハダニ類の天敵を放飼したほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

(オ) 農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。

(令和 7 年度技術情報第 11 号、令和 7 年 7 月 31 日付参照) →



(カ) 農薬によっては、ミツバチに影響があるので、選定に注意する。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 73% (平年 65%) : 並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

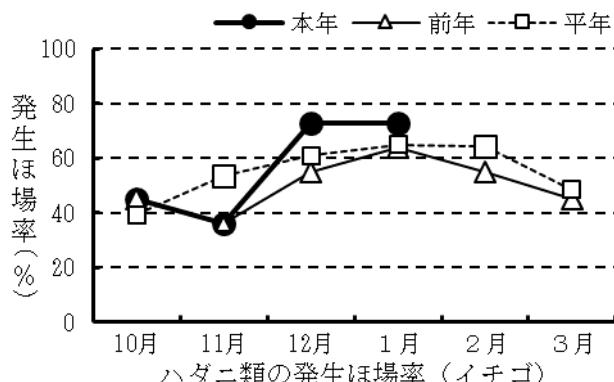
- (ア) 天敵を放飼しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行なう。

(イ) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏に付着するよう散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布に努める。

(エ) 農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。

(オ) 農薬によっては、ミツバチに影響があるので選定に注意する。



5. キャベツ

(1) 菌核病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 24% (平年 20%)

：並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

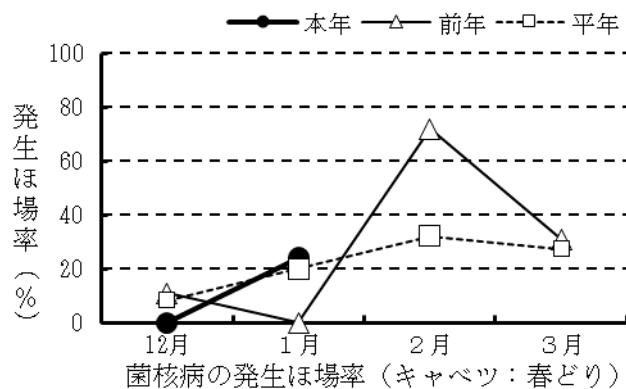
(ア) 菌核病は子のう胞子の飛散等によ

り、地面に接する外葉などや株元、時には結球部位からも感染するため、農薬は株全体に十分付着するように散布する。

(イ) 農薬散布の際は、展着剤を加用するとともに、特に、結球中期以降のほ場では、浸透移行性のある農薬を組み合わせて、ローテーション散布を行うことで、防除効果が高まる。

(ウ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、ほ場外へ持ち出し、適正に処分する。

(エ) 収穫終了後は、次作の伝染源を減らすために、残さを速やかにほ場外に持ち出し、適正に処分する。また、残さ持ち出しが困難な場合は、早期耕耘等により残さの分解を促す。



(2) ベと病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 24% (平年 2 %)

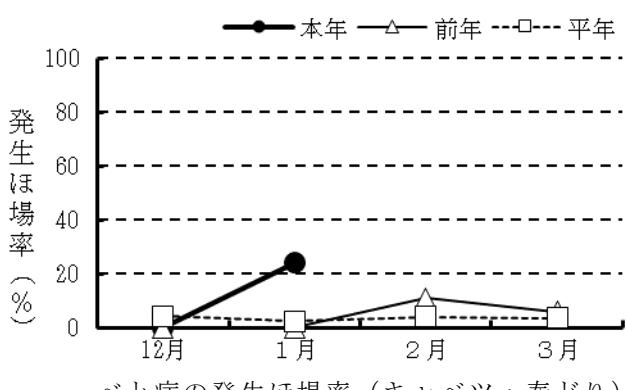
：高い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 多湿条件で発生しやすいので、排水対策に努める。

(イ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するため、発病前の予防散布に努める。発病が認められたら直ちに治療効果のある農薬を散布する。

(ウ) 発病株はほ場外へ持ち出し適正に処分する。



6. エンドウ類

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

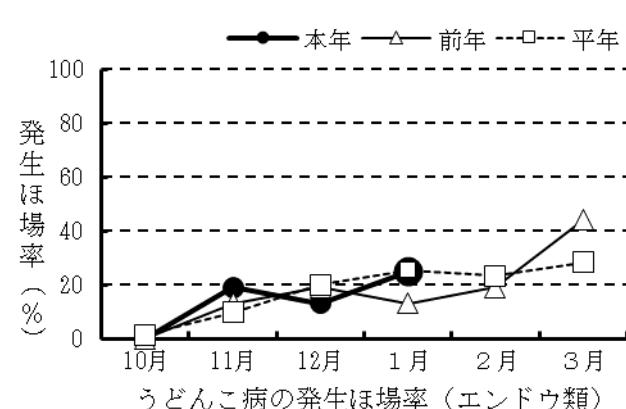
(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 25% (平年 26%)

：並



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) かん水不足や着莢負担等による草勢低下で発生しやすいため、適正な管理に努める。
- (イ) 多発するとごま症の発生につながるため、初期防除に努め、下位葉の葉裏まで農薬が十分付着するように散布する。
- (ウ) 既に発生しているほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。
- (エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(2) アザミウマ類

ア 予報内容

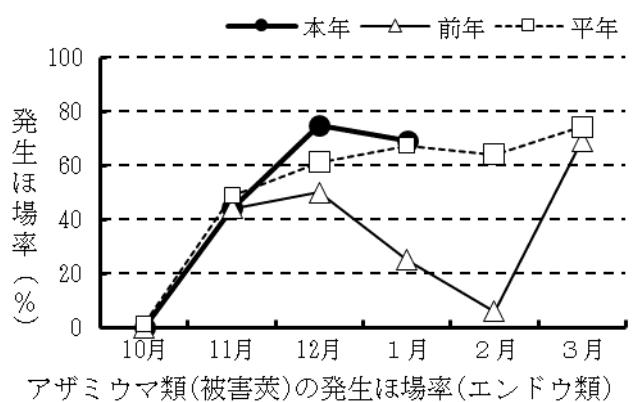
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 69% (平年 67%)
：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類は花の子房部分に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、初期防除に努める。
- (イ) 農薬の付着しにくい花弁の奥に寄生するので、丁寧な農薬散布に努める。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



アザミウマ類(被害莢)の発生ほ場率(エンドウ類)

7. バレイショ

(1) 痘病 (令和7年度技術情報第25号, 12月25日付け参照) ➡



ア 予報内容

- (ア) 発生地域 熊毛地域, 奄美地域
- (イ) 発生量 熊毛地域：並
奄美地域：やや少

イ 予報の根拠

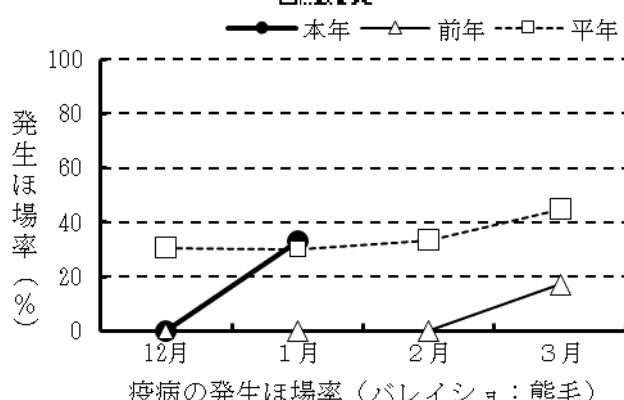
- <熊毛地域>
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 33% (平年 30%)
：並

<奄美地域>

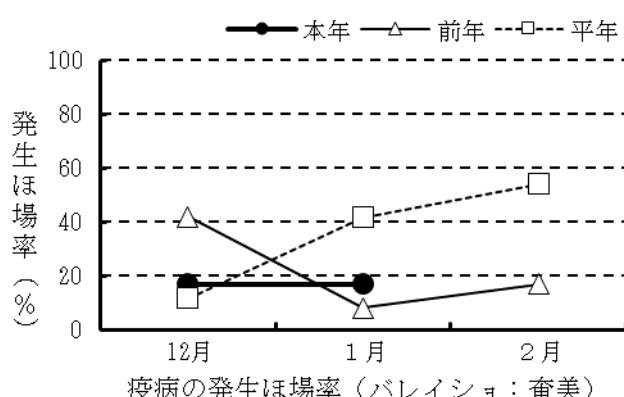
- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率 17% (平年 42%)
：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ほ場の見回りを行い、発生が認められたら直ちに治療効果のある農薬の散布を行う。その後は、進展状況に応じて7～10日後に追加散布を行う。



痘病の発生ほ場率(バレイショ: 熊毛)



痘病の発生ほ場率(バレイショ: 奄美)

- (イ) 疫病は降雨等で急激に拡大するため、未発生のほ場でも発生前の予防散布を行う。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。
- (エ) 収穫が遅れると被害拡大につながるため、適期収穫を行う。
- (オ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適正に処分する。
- (カ) 茎葉の風傷害を防ぐために、防風対策を講じる。

(2) 菌核病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 熊毛地域、奄美地域
- (イ) 発生量 熊毛地域：並
奄美地域：やや少

イ 予報の根拠

<熊毛地域>

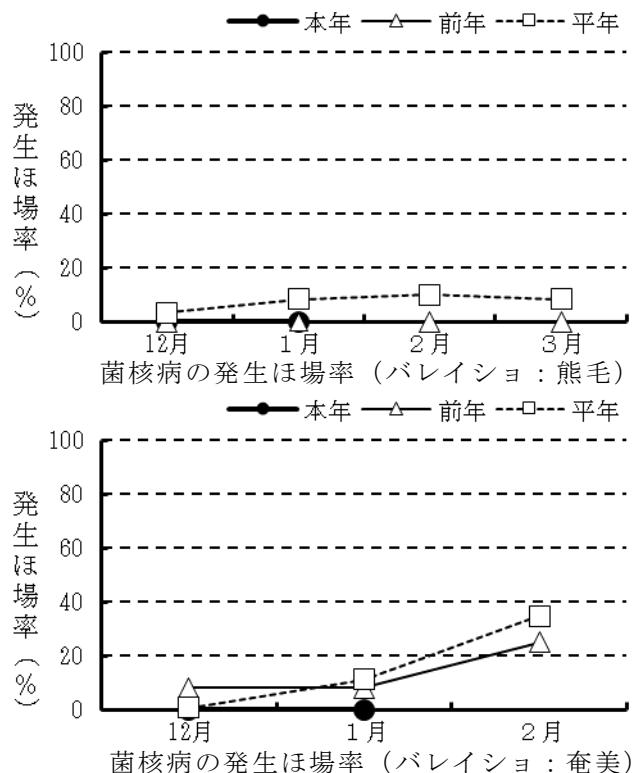
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 0 % (平年 8 %) : 並

<奄美地域>

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率 0 % (平年 11%)
: やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件で発生しやすいので、天候に注意し排水対策に努める。
- (イ) 定期的にほ場の見回りを行い、発病を確認し次第、初期防除を行うようとする。
- (ウ) 病原菌は地際部や枝分岐部付近から感染しやすいので、農薬は対象部位へ十分付着するように散布する。
- (エ) 発病株は次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外へ持ち出し処分する。
- (オ) 茎葉の風傷害を防ぐために、防風対策を講じる。



III. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土（施設） やや少

奄美地域（露地） 並

イ 予報の根拠

<県本土（施設）>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 20%（平年 30%）

：やや低い

<奄美地域（露地）>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 20%（平年 6%）

：やや高い

発生程度が低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

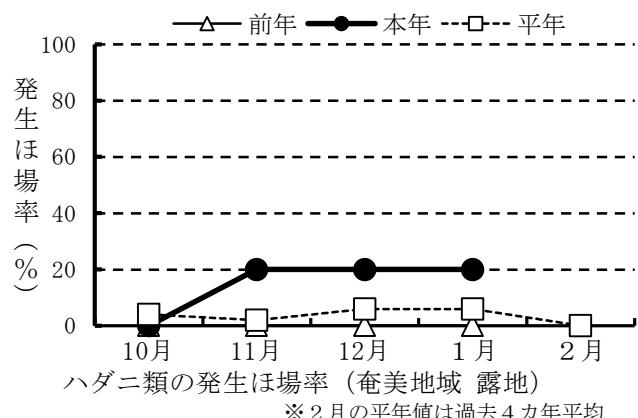
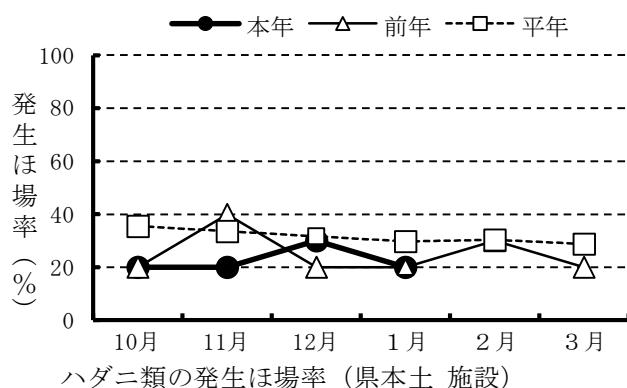
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等

で スポット状に発生する場合が多いので、

ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 農薬は葉裏までよく付着するように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土（施設） やや少

奄美地域（露地） 並

イ 予報の根拠

<県本土（施設）>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 20%（平年 31%）

：やや低い

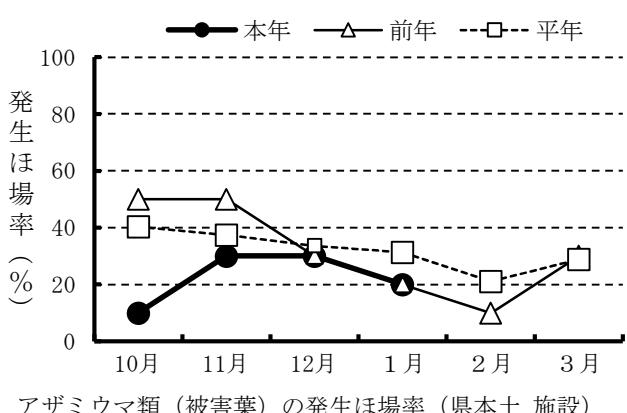
<奄美地域（露地）>

(ア) 調査結果 発生量：並

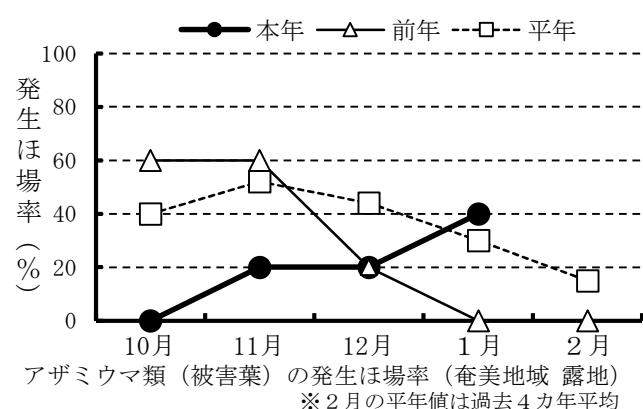
発生ほ場率 40%（平年 30%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類の発生動向を把握するには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率



アザミウマ類（被害葉）の発生ほ場率（県本土 施設）



はやや低いと思われる。

- (イ) クロゲハナアザミウマの発生が認められる場合、本種は主に中下位葉に寄生しているため、農薬は中下位葉の葉裏までよく付着するように散布する。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。
- (エ) アザミウマ類はキクえそ病（T SWV），キク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。

決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。

2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。

3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。

4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。

5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。

6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。

7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。

8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。

9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。

10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

○調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。

○野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。

○調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。

○気象予報は、向こう1か月の長期予報。

○平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。